

植物である私たちにとって最大の関心事は、子孫が繁栄するために種子を育てることです。ただ、私たちは自分で動くことができないので、生息域を広げるにはあらゆる知恵を絞る必要があります。例えば、受粉しやすくするために、いい香りを放って昆虫を集めたりしています。受粉をスムーズに進めるため、おしべ(花粉を作る部分)やめしべ(花粉を受け取る部分)の長さを調整したりもしています。

私たちマムシグサ(日本のテンナンショウの品種)は巧妙な隠し技を持っています。見てください！

死を呼ぶテンナンショウ

テンナンショウはサトイモ科の一種です。雌雄異株なので、雄株と雌株に分かれて育ちます。したがって、昆虫がいなければ受粉できません。羽虫が香りに引き寄せられ、雄株の仏炎苞（花を包み保護する部分）に入り込みます。花粉を付けた羽虫は仏炎苞の根元にある小さな穴から出ていくのですが、雌株にはその出口がありません。つまり、雌花への授粉を済ませた羽虫には既に逃げ道がなく、テンナンショウの中で待つのは死のみなのです。

雄から雌に役割を変えるホオノキ

春が来ると、ホオノキは芳しい香りを放つ大きな花を咲かせます。めしべは花の中心にあり、らせん状に生えたおしべに囲われています。開花 1 日目にはめしべだけが機能し、2 日目以降はおしべだけが生殖機能を果たします。このように、ホオノキはめしべとおしべのタイミングをずらすことによって自家授粉を防ぎます。

2 種類の花を咲かせるイワイチョウ

イワイチョウは人気の高い高山植物で、被子植物に分類されます。2 種類の花を咲かせることで知られ、両方ともめしべが長く、おしべが短いのですが、片方はめしべを複数、おしべを 1 本持つのに対し、もう片方はめしべを 1 本、おしべを複数持ちます。ハナアブが前者の花を訪れると、複数の長いめしべから花粉をもらい

ますが、短いおしべには触れません。次にハナアブが後者の花を訪れると、その花粉は1本の長いめしべに移されます。この仕組みにより花は確実に異花授粉し、遺伝的多様性、さらには長期にわたる種の生存が実現するのです。